

学術交流協定校からの訪問

テキサス大学医学部生の訪問

医学科長 泉 啓 介

今年も6月13日-15日の3日間、夏休みを利用してテキサス大学医学部から2年生のレネ・A・コロラド君（MD-PhD コースでニューロサイエンスを専攻）とマイケル・H・バイク君、1年生のアイザック・チュア君が昨年同様アニール・D・クルカーニ教授の引率で本学医学部を訪れた。研究部長表敬訪問のあと



前列左より2人目 レネ・A・コロラド君、
中列右より アイザック・チュア君、アニール・D・クルカーニ教授、
後列右 マイケル・H・バイク君

剖検症例の検討会に参加してもらったが、2年生のバイク君が投影された腎臓の組織像を見るなり、「あれは糖尿病性腎症だ。習ったばかりだ。」と私に小声で話しかけた。彼は本学でいえば3-4年生にあたるが、なかなかやるなど感じた瞬間である。14日は学内見学、教授会議での挨拶のあとカフェテリアで歓迎パーティーが開催された。今年はたまたまモンゴル健康科学大学学生の訪問と重なったために、15日の夕方にプレゼンテーション&ディスカッションの時間を設け、米国・モンゴル・本学の医学科生にそれぞれの国や学生生活の紹介をしてもらった。本学の3年生が部活動やアルバイトや居酒屋で過ごす時間の長さを紹介した時にはさすがに両国の学生とも驚いたようである。後日、授業以外の1日あたりの勉強時間（主に基礎医学）をアンケート調査してみたが、テキサス大学5.2時間、モンゴル健康科学大学3.8時間、徳島大学1.4時間であった。なお、テキサス大学の場合、授業出席率は約10%であり、これに自宅・図書館で勉強するe-ラーニング分の約5時間が加算される。写真は15日に本学6年生とテキサス大学からのメンバー4人が藍染めを体験した時のものである。最後に、今回の訪問に際し、事前の打ち合わせから始まって頻回の予定変更、計画等に尽力していただいた村澤医学部長補佐に感謝したい。

モンゴル健康科学大学バイエル君のホームステイ日記

地域医療学分野 谷 憲 治

バイエル君（HSUMの5年生）が我が家で過ごした4泊5日は、家族全員にとって忘れることのできない貴重な思い出となった。彼は、昨年私が本学の医学生たちとモンゴルを訪問したときに世話をしてくれた学生の一人だったこともあって、今回のホームステイの依頼は喜んで引き受けさせていただいた。家族の一員として、夜は食事をしながら、またアルコールを飲みながらお互いのことを語り合った。話の途中で「ちょっと聞いてくれ」と、突然モンゴルの歌を歌い始めたり、踊り出したり。初日からすでに我が家の20歳と14歳の息子たちよりリラックスして過ごしていた。私の妻に対しては「My mother」と呼び、少し姿が見えないと「Where is my mother?」と捜す幼さを妻もまんざらではない様子であった。ジョークが好きなので、「俺の彼女はミス・ウランバートルで、1年かけてくどいてゲットした」とか「野菜が食べれないのは、幼少の頃大声で泣いている俺をだまらせるために姉が俺の口に玉ネギを丸のままつまこんだのがトラウマになっているからだ」と言っていたのも今思えば真実かどうかは分からない。うちの長男を「My younger brother」と呼び、深夜は一つの部屋でいろいろと語りながら過ごしたようだ。毎朝の彼はパンツ一枚のあらわな姿で、目覚めが大変

悪くふとんから起こすのに苦労した。6月17日はフリーデーであったので、昼は家族で鳴門へ観潮に出かけ、夜は長男がバドミントンの練習に連れて行った。帰国の前夜、彼はお別れの挨拶に我が家を再び訪れてくれた。家族一人一人とハグをしながら御礼の言葉をささやく彼の目にはキラリと光るものが見えた。バイエル君、しばしのさようなら。卒業したら徳島大学で医学研究をしたいという君の夢がかなうことを心から願っている。（写真中央がバイエル君）



モンゴル学生との交流

医学科5年 河南 真吾

昨年僕らに素晴らしい思い出を作ってくれたモンゴル医学生が、ついに徳大にやってきました！新設された「くらら」での歓迎夕食会で阿波踊りをしたり、病院実習を一緒に回ったり、昼敷きの下宿アパートに泊まってもらったり…大変なスケジュールでしたが、日本の医療や医学生生活を肌で感じてもらったのではないのでしょうか。他国の医学生と交流することで、日本の将来の医療を担う僕らも刺激を受け、多く学ばされます。そのような機会が後輩にも続いていけばと思います、滞在2日目のディスカッションには有志の3年生に参加してもらい、モンゴルとテキサスの医学生を前にプレゼンをしてもらいました。その感想の一部を紹介します。

Q；ディスカッションに参加すると決めたとき、どんな気持ちだった？

「他国の医学生と知り合う機会は滅多に無いので、友達になれたら良いなって思いました。」

「私は英語があまりできないので不安でした。」

Q；英語でのプレゼン準備は大変だった？

「日本独自の事を発表しようと頑張りましたが、やっぱり英語の発表は難しかったです。」

「毎日を当たり前で過ごしていたので、いざ学生生活の中で日本らしさを探すとなった時が難しかったです。」

Q；彼らと交流してどんなことを感じた？

「一番感じたのが英語力の違いでした。テキサスの医学生は勿論ですが、モンゴルの医学生も英語で自分の意思表示がさらっと出来ていて自分の英語力の低さを痛感しました。また自分の意見をはっきり言える点でも違いを感じました。」

今回のように3ヶ国集まったのはとてもよかったです。国によりカリキュラムに大きな違いがあり、医学生の雰囲気やモチベーションにも違いがあることが分かりました。プレゼンをしてくれた西川君、黒川君、能智さん、長谷川さん、本当にありがとう！また期待してるよ。HSUM との交流が徳大の新しい伝統として引継がれることを願っています。

モンゴル学生との9日間

医学科5年 近藤 可菜

私の家ではモンゴルから2人の留学生を受け入れました。彼女たちと過ごした9日間はとても刺激的でした。それは彼女たちにとっても同じだったようです。私たち日本人がアメリカでホームステイするのと、彼女達モンゴル人が日本でホームステイするのでは、また違う感覚であったように思います。

ある晩は彼女たちが私の着物を着て和室で写真をとったり、休日には京都に出かけたりと、なるべく日本らしい毎日を過ごしました。彼女たちは写真が大好きなようで、最新のデジカメで全ての出来事を写真に撮っていました。

そして見知らぬ場所小さくなりがち日本人と違い、モンゴル学生たちは常に積極的でした。やってみたいこと、知りたことはすぐにアピールして、堂々としていました。彼女たちとの9日間は私にとっても日本の文化や医療を見つめなおす貴重な日々となりました。

